



## 李商隱の詩歌に見られる杜甫詩の影響：「曲江」詩の「傷春」を中心にして

著者	加固 理一郎
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	75
ページ	30-42
発行年	2017-06-24
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00152075">http://doi.org/10.15068/00152075</a>

# 李商隱の詩歌に見られる杜甫詩の影響

―「曲江」詩の「傷春」を中心に―

加 固 理 一 郎

## 一、序

李商隱（八一二？～八五八）は自分の学んだ詩文として、「韓（愈）文杜（甫）詩、彭陽（令狐楚）章檄」（「樊南甲集序」<sup>①</sup>）を挙げる。このこともあって、李商隱の詩歌の制作における杜甫詩の影響は、古くから注目されてきた。そこで影響関係を指摘される作品はいくつかあるが、本稿では主に「曲江」詩を取り上げる。この詩は、清の何焯「義門読書記」巻五十八、李義山詩集下で「蓋し此の篇は句句少陵の『哀江頭』と相對して言うなり。」<sup>②</sup>と評されたのはじめとして、杜甫詩との関係が論じられている。それら先人の論評を踏まえ、李商隱「曲江」詩と杜甫詩との関わりを明らかにする。そこからさらに、李商隱が杜甫詩を受容することにより見いだしたものについて考えたい。

## 二、「曲江」詩の従来の解釈

まずはじめに、李商隱の「曲江」<sup>③</sup>詩を引用する。

望断平時翠輦過 望みは断ゆ平時翠輦の過りしを  
空聞子夜鬼悲歌 空しく聞く子夜鬼の悲歌するを

金輿不返傾城色 金輿は返らず傾城の色

玉殿猶分下苑波 玉殿は猶お分かつ下苑の波

死憶華亭聞唳鶴 死なんとして華亭にて唳鶴を聞くを憶い

老憂王室泣銅駝 老いては王室を憂えて銅駝に泣く

天荒地変心雖折 天荒地変じ心折ると雖も

若比傷春意未多 若し春を傷むに比ぶれば意未だ多からず

詩題の「曲江」は、唐の都である長安の南東部にあった池の名である。玄宗皇帝（在位七一二～七五六）がこれを補修して遊園としたが、安史の乱（七五五～七六三）で荒廃した。その後、文宗皇帝（在位八二六～八四〇）によつ

て修築が行われた。<sup>(4)</sup>しかし甘露の変(八三五)が勃発したため工事は完成しなかった。この事変の翌年の上巳の日に、文宗は曲江で百官の宴を催した。令狐楚がそれを戒めた。<sup>(5)</sup>楚の庇護のもとにあつた李商隱は、この時期に「有感」などの詩によって楚と一体になって政局を批判していた。以上の史実に依拠して、この詩は甘露の変を安史の乱と重ね合わせて詠んだと見るのが一般的である。

ただし、作品の細部にわたる解釈については諸説がある。その中でも議論の焦点は、結びの句に見える「傷春」である。この語は、字義通りの意味で理解されることは少ない。次にその従来の解釈を検討する。

まず、この詩に対する清の姚培謙の解釈を引用する。

前四句は明皇貴妃の事(安史の乱)に感じ、後四句は時事(甘露の変)の心を驚かすを述ぶ。陸機・索靖は、此の人皆天荒地変の恨み有れども、若し我が今日の春を傷むの心に較ぶれば、則ち猶お未だ甚しからずと為す。蓋し王涯等の冤を含むは、陸機を視るより更に甚しく、曲江亭の遽かに廃せらるるは、索靖に較ぶるに更に悲しきなり。

姚培謙箋注『李義山詩集』卷十二<sup>(6)</sup>

これは、「傷春」を甘露の変で王涯らが冤罪で殺されたこ

とと、文宗が再建しようとしていた曲江亭が廃されたことを悲しむ語だとするものである。この詩と史実との関連は、この他にも様々な説が提示されている。しかし、「傷春」については、この姚培謙の解釈と同じく甘露の変による社会の混乱に対する作者自身の憂いを含むと見なすのが、主流になっている。近年では陳永正<sup>(7)</sup>らがこれに従う。

さらに、この語には、社会の混乱に対して何もできない自分の無力さへの悲嘆が加わっているとする解釈も行われる。これを示しているのは、羅宗強<sup>(8)</sup>、鄧中鵬<sup>(9)</sup>である。下定雅弘はそのような解釈をさらに深め、「傷春」の悲しみについて次のように述べる。

商隱の悲哀は、国家の衰頹や悲劇と関係している。だがそれは、国家の命運を悲しみ傷む思いではなく、自分がかれと関わるできない、自己のありようについての悲痛であり苦悶である。

「李商隱の『曲江』をどう読むか?—その『傷春』の意味—」(全国漢文教育学会『新しい漢字漢文教育』第五十号、二〇一〇) 七四頁

また、この下定の解釈に対して大山岩根は、「傷春」には「憂国の情」とともに「科挙及第を果たせず政治の場から疎外された自己の不遇感」が込められているとする(「李

商隱詩における『傷春』について——『曲江』詩を中心に——  
〔東北大学東洋史学研究室『集刊東洋学』第一一二号、二〇一五〕三七頁〕。

下定と大山の解釈は、「傷春」を従来の解釈と同じく甘露の変に対する李商隱の思いを表しているとするが、その悲しみは自分自身の境遇のほうにより強く向かっているとするものである。この解釈は、次の引用に見えるような杜甫と比べた李商隱に対する評価に当てはまっている。

当然、李商隱の沈鬱不同於杜甫の沈鬱。杜詩的沈鬱源於哀時撫事的憂憤、是瀕洞風塵中一位絕頂熱腸的詩人憂國愛民的表现。…李商隱徒然有杜甫的悲、而未能汲取杜甫詩篇中融成一氣的壯。原因沒有別的、他沒有老杜的襟抱和器宇。他的悲愁往往停留在個人榮辱上、而不能提得更高。

吳調公『李商隱研究』（上海古籍出版社、一九八二）第七章、四、李商隱所受杜甫的影響、一七六頁

ここでは、同じく憂国の情を詠んでも李商隱には杜甫のように大きな気概はなく、個人的な境遇を悲しむに留まることが多いとされる。時事について詠じた「曲江」詩の中で最も深い思いである「傷春」が自分の境遇に対する悲し

みを表していると思ふのは、このような評価に適合するものである。さらに、この見方に沿って言えば、李商隱は「曲江」詩を作るに当たり、国政に関与する文学のあり方を杜甫詩から継承しようとして、それが不十分のままに終わったということになる。

その一方で、「曲江」詩には杜甫詩と全く別の価値観が表明されているとする説もある。それは、「傷春」を女性の死を悼む語だとする解釈から導き出される。まず清の馮浩は、文宗の妃で文宗崩御の後に死を賜った楊賢妃を悼むものだとする<sup>(10)</sup>。また、同じく女性でも楊貴妃に対するものだとする解釈もなされる。これを唱える張采田は、一首全体が安史の乱のことを言っているとして馮浩の解釈を否定する<sup>(11)</sup>。近年では黄世中が楊貴妃説をとっている<sup>(12)</sup>。

高橋和巳は、この両者のうち馮浩の解釈に従って楊賢妃のこととする。それによって、李商隱には「通常の士大夫のもつ一般的な価値観とは異った、価値観が出来あがっていた」とする。その価値観とは「国家よりは個人、権力者の死よりはその愛妃の非運、政治的正義よりは満たされぬ愛」を重んじるものである（高橋和巳作品集別巻『詩人の運命』（河出書房新社、一九七二）一三四頁）。これは、「曲江」詩の解釈によって李商隱詩に杜甫詩とは別の意義を認

めたものとして注目される。杜甫の政治詩は、士大夫の価値観を体現した詩歌の代表的なものとされる。李商隱はその継承を為そうとしてできなかったのではなく、敢えてそれとは別の方向へと進み、独自の価値観に立脚した文学を形成したということである。

ただし、高橋の解釈にも問題が残る。それは、楊賢妃が皇太子の廃立を巡る政争を繰り広げた当事者の一人であり、その死からは政治的な意味を払拭できないことである。これを純粹な愛の悲劇として描くならば、脚色が必要だろう。しかし、この詩にそれはないのである。

以上のように「曲江」詩の「傷春」の解釈はなされてきた。この「傷春」の語は『楚辭』『招魂』が出典とされる。<sup>14)</sup>

だが、この語は楚を放逐された屈原の思いを表した原典を離れて多様な意味が付加され、詩歌に広く用いられている。このような詩語に対しては、個別の作品の文脈を尊重して理解すべきであろう。そこで、以下にこの詩の尾聯を杜甫詩との関わりに着目しつつ読み解いてゆく。先に結論を示せば、「傷春」は文字通り「春の季節を悲しむ」と取るのがふさわしいということになる。そして、そのように解釈すれば、この語を王妃の死に対する思いと取るよりも、この詩に含まれている通常の士大夫とは異なる価値観をより

明確に示すことができるのである。

### 三、「天荒地変心雖折」の解釈

まず、第七句の「天荒地変」は、第六句までに表された大きな動乱を指している。しかし、管見ではその先行用例を見いだすことができず、特殊な用語であると思われる。ただし、類似する語であれば、杜甫の「冬末以事之東都、湖城東遇孟雲卿、復歸劉顥宅宿、宴飲散、因為醉歌」<sup>15)</sup>（冬末事を以て東都に之かんとし、湖城の東にて孟雲卿に遇い、復た劉顥の宅に歸りて宿し、宴飲散じ、因りて醉歌を為る）詩に用いられている。次にこれを引用する。

天開地裂長安陌 天開け地裂く長安の陌

寒尽春生洛陽殿 寒尽き春生ず洛陽の殿

この詩は、乾元元年（七五六）の冬に洛陽から華州へ戻る時に作られた。この上の句は、安祿山の軍勢が長安を蹂躪したことを表している。杜甫にとって安史の乱は単なる軍事的な動乱ではなく、皇帝を中心とする天地すなわち宇宙の秩序を揺るがす事件だったのを「天開地裂」と表現する。李商隱「曲江」詩の「天荒地変」が具体的に何の事件を指すかは諸説があるが、主なものは安史の乱または甘露の変である。その前者であれば、この杜甫詩と同じ事件で

ある。また後者だとすれば、やはり首都長安での動乱であり、さらにその発端は宮廷内部での事件である。そのことから、李商隱はこれを「天荒地変」と表現したのだろう。

次の「心雖折」であるが、これは、杜甫詩の語に拠っていることがさらに明らかである。「心折」の現存する最初の用例は、江淹「別賦」(『文選』巻十六)にある。この賦は主に旅による別離の諸相について述べ連ねたものである。「心折」は、その結末近くで次のように用いられる。

是以別方不定、別理千名。有別必怨、有怨必盈。使人意奪神駭、心折骨驚。(是を以て別方は定まらず、別理は千名あり。別れ有れば必ず怨み、怨み有れば必ず盈つ。人をして意奪われ神駭き、心折れ骨驚かしむ。)李善注では、『春秋左氏伝』から「無折骨」の句を引いて、「骨驚心折」は「骨折心驚」の互文であると<sup>(16)</sup>する。この「心」が「折」れるという表現は唐代詩人の中では特に杜甫が愛用し、五首の詩に用例が見られる。それに対して杜甫以外には、皎然に二例、高適に一例、顧況に一例そして李商隱に一例があるのみである。

これら唐詩の用例は、語義が原典から変化している。すなわち、江淹「別賦」での「心折」の「折」は「骨折」の「折」なので、一過性の現象である。しかし、唐詩の中では、

「心易折」(皎然「兵後送薛居士移家安吉」(兵後薛居士の家を安吉に移すを送る)詩『全唐詩』巻八百十八)、「心弥折」(高適「薊門不遇王之渙郭密之、因以留贈」(薊門にて王之渙・郭密之に遇わず、因りて以て留め贈る)詩『劉開揚『高適詩集編年箋註』中華書局、一九八一、二五頁)、<sup>(17)</sup>「心常折」(杜甫「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客、一百韻」(秋日夔府にて懷いを詠み鄭監・李賓客に寄せ奉る、一百韻)詩)とあるように、これを反復し持続する現象として用いる。これらは、心がくじける、気持ち弱くなるなどの意味となっているのだろう。

このように「心」「折」の現象的な意味は変化している。しかし、この語が表す精神状態は、江淹「別賦」とほとんど変わらない。すなわち、唐詩の中では主に、別離、旅愁、異郷にある悲しみを表わすために用いられるのである。このことを、杜甫詩の「心」「折」の用例から示す。

まず、『秦中雜詩二十首』其一の例を示す。

滿目悲生事 滿目生事に悲しむ  
因人作遠遊 人に因りて遠遊を作す

……

西征問烽火 西征烽火に問い  
心折此淹留 心折れ此に淹留す

これは現存する杜甫詩の中で最初の用例である。ここでは、  
辺地の秦州へ行くことを余儀なくされた悲しみを言う。次に「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客、一百韻」詩の例を示す。

陣図沙北岸 陣図沙北の岸

市暨瀼西巔 市暨瀼西の巔

羈絆心常折 羈絆せられて心常に折れ

棲遲病即痊 棲遲して病即ち痊愈

この「羈絆」の解釈には諸説があるが、旅先での生活の不自由さと取ることができる。次に「冬至<sup>19</sup>」詩の例を示す。

杖藜雪後臨丹壑 杖<sup>20</sup>を杖<sup>20</sup>いて雪後丹壑に臨む

鳴玉朝來散紫宸 玉を鳴らして朝來紫宸に散ず

心折此時無一寸 心折れて此の時一寸も無し

路迷何處是三秦 路迷いて何れの處か是れ三秦なる

この詩では、都を離れ旅人となり、さらに都へ戻る道を見失っていることを表す。次に「地隅<sup>20</sup>」詩の例を示す。

喪乱秦公子 喪乱秦の公子

悲涼楚大夫 悲涼楚の大夫

平生心已折 平生心已に折れ

行路日荒蕪 行路日々に荒蕪す

これは、戦乱で故郷に帰れない王粲と祖国を追放された屈原を取り上げて、彼らと同じく自分もまた故郷に戻れない

ことを悲しむものである。

以上の四例は、旅愁を表すものである。それらに対して、次の「水宿遣興、奉呈群公<sup>21</sup>」（水宿興を遣る、群公に呈し奉る）詩はやや異質である。

勲庸思樹立 勲庸樹立せんと思ひ

語默可端倪 語默端倪すべし

贈粟困庀指 粟を贈るに困は庀に指すべく

登橋柱必題 橋に登れば柱に必ず題せん

丹心老未折 丹心老ゆるも未だ折れず

時訪武陵溪 時に訪<sup>22</sup>わん武陵の溪

この「丹心」は、「勲庸思樹立」とあることから、皇帝への忠義の心である。さらに、これがいまだ「折」れていないと否定形になっているのも、他の例と異なる。だが、この詩には先の引用より前に次の句が見える。

暮年漂泊恨 暮年漂泊を恨み

今夕乱離啼 今夕乱離に啼く

ここに示されるように、この詩は戦乱の中での漂泊の旅にあつて作られた。その境遇にあれば「心」が「折」れるものだという前提があつたため、「丹心老未折」の句が構成されたのであろう。

杜甫は、その生涯の多くの時を旅に過ごした。その漂泊



の思いと関わって愛用したのが、「心」「折」なのである。それは、原典に基づきつつもやや意味を拡張して用いられている。一方、李商隱「曲江」詩の「心」「折」は、直接的に旅愁や別離の悲しみを表したものである。これは、「天荒地変」の動乱における思いを表している。だが、ここにも「心折」の本来の意味が含まれていると見られる。これを以下に述べる。

杜甫が「地隅」詩で故郷を失った人物として王粲と屈原の二人を対置するように、李商隱は陸機と索靖を用いる。その両者を対置した第五・六句を承けるのが、「心」「折」を含む第七句である。まず第五句の陸機は吳郡華亭の人であり、晉に仕えて洛陽に住んだ。やがて八王の乱が起ると、その戦乱の中で罪を得て処刑された。殺される間際に、華亭の鶴の鳴き声をまた聞くことができなくなった、と嘆いた。この思いは望郷の念を含み、「心」「折」の原典の含意に合っている。

対する第六句に用いられた索靖の故事は、望郷の念を含むものではない。索靖は、晉の都の洛陽の宮門にある駱駝の銅像を指して、これをイバラの茂る中で見るだろうと嘆いた。これは天下の動乱を予感したもので、実際に八王の乱で反乱軍が洛陽に攻め入ることになったのである。<sup>(23)</sup>

しかし、この索靖の故事のほうが、李商隱の置かれた状況に近い。つまり、第一句から第四句に描かれているように、「平時」の曲江周辺の情景は甘露の変による戦乱で一变し、残るのは波立つ水面だけである。それは索靖が戦乱の中で目にしただろう洛陽の「銅駝」に通じる。この第六句を第五句の陸機の故事と対置し、第七句の「心」「折」で承ける。それによって、今の自分の思いは、故郷に二度と戻れなくなった者が懐く望郷の念に近いことを示したのであろう。すなわち、曲江は動乱によって破壊され、見慣れたはずの場所が異郷のようになってしまい、そこで繰り広げられていた長安の繁栄を象徴する情景は、すでに追憶の中にしかないのである。

「天荒地変」の具体的な内容だけでなく、そこで「心」「折」れた主体は誰かについても諸説がある。しかし、どの説を採るにせよ、ここには甘露の変での李商隱自身の体験によるこうした心情が反映されていると考えられる。

#### 四、「若比傷春意未多」の解釈

続いて、第八句も見えてゆく。ここでは、「心」が「折」れるよりも深い思いとして「傷春」が提示されている。次に、この「傷春」について検討する。先に述べたように、



この語は「心折」とは異なつて、作品の内容に従つて多様な意味が付加されている。そこで、「曲江」詩の「傷春」を解釈するのに参照すべきは、同じように動乱の中での春の思いを述べたものである。そのような「傷春」の語の最初の用例は、杜甫詩に見いだせる。

杜甫には「傷春」五首<sup>(24)</sup>の詩がある。これは、代宗の広徳元年（七六三）に吐蕃が長安に侵攻したことを梓州・閬州にいた杜甫は翌年の春になつて知り、作つたものである。次に其一の冒頭を引用する。

天下兵雖滿 天下兵滿つと雖も

春光日自濃 春光日々に自ら濃やかなり<sup>おろずかこま</sup>

ここでは、戦乱の非常事態といつも変わらず規則正しく巡ってくる春の季節とを対比している。この対比は五首の詩の中で何度も繰り返される。そして、其五では次のように詠じている。

春色生烽燧 春色烽燧に生じ

幽人泣薜蘿 幽人薜蘿に泣く

戦乱の中に巡り来た春を感じ、ますます悲しみを深くする。これが杜甫の「傷春」なのである。

大山岩根は、この杜甫詩と同様の思いが孟郊の「傷春」詩などに表されており、また「傷春」が詩題ではなく詩中

において同様に用いられている例が李嘉祐の詩にあることを指摘する（前出論文二八～九頁）。李商隱の「曲江」詩の「傷春」の語も、まずはこれらの例と同様の意味を含み持つものとして解釈すべきである。それによつて、この詩の尾聯は次のように解釈できる。「人間社会の様相が一変するほどの動乱は、心をくじけさせる。しかし、その動乱そのものより、こんな状況の中でもいつもと変わらず巡り来た春の景色から感じる悲しみのほうが、より深いのだ。」以上に述べたように、「曲江」詩の尾聯は杜甫詩との関わりが深い。しかし、李商隱は杜甫詩をそのまま受け継いだのではない。それを示すため、次に杜甫「傷春」詩の其五の結びを引用する。

君臣重修徳 君臣重ねて徳を修むれば

猶足見時和 猶お時の和するを見るに足らん

杜甫は、春景色を悲しむだけでは終わらない。君臣の徳によつて人間社会にも自然界と同じ秩序が回復される希望を述べて詩を結ぶ。このように、自然と人間を対比しても杜甫の思いは人間社会のほうに向かっているのである。このことは「哀江頭」<sup>(25)</sup>詩にも表れている。

この詩では、次の引用部分で自然と人間を対比している。  
人生有情淚沾臆 人生情有りて涙は臆を沾おす

## 江草江花豈終極 江草江花豈終極あらんや

これについて、吉川幸次郎は「しかく自然は非情な悠久さにある。それとともに人間の悲劇、またそれにそがれる『人生有情』の涙も、はてしはない。」（『杜甫詩注』第三冊「筑摩書房、一九七九」（二二八頁）とする。つまり、非情の自然と有情の人間の対比と理解するのである。また、森野繁夫は「杜甫は『自然の悠久さ』を思いつつ、楊貴妃の悲劇のような悲しく辛いことが繰り返される、不安定な、脆い人間の世の中を嘆いている。」（『杜甫「哀江頭」詩について』（安田女子大学中国文学研究会『中国学論集』三九号、二〇〇五）四頁）とする。これは悠久不変の自然と不安定な人間の対比ととるものである。

このように、ここでの自然と人間との関係のとらえ方は様々に解釈できる。しかし、いずれにしても、杜甫は人間の不幸のほうを悲しんでいるには違いない。そのことは、次に引用するように詩の結びにも表れている。

黄昏胡騎塵滿城 黄昏胡騎塵城に満つ

欲往城南望城北 城南に往かんとして城北を望む

これは、賊軍に占領された長安の様子である。ここでは自然物は用いられず、人間社会の秩序が失われた状況のみが描かれる。

このような不安定な人間と安定した自然との対比は、杜甫詩に多く見られる。先に「曲江」詩の「天荒地変」との関わりで引用した「冬末以事之東都、湖城東遇孟雲卿、復歸劉顥宅宿、宴飲散、因為醉歌」詩も、その例である。この詩では、「天開地裂」の大乱と「寒尽春生」の安定した季節の推移とを対比させている。そしてさらに、杜甫が自然と人間を対比するとき、天人相関の考え方によって人間界にも自然界と同じ秩序がもたらされるべきだとすることがある。「傷春」五首はその例である。これが、杜甫の自然と人間に対する基本的認識なのである。それに対して李商隱「曲江」詩は、人間社会よりも自然のほうへと心を傾けて終わっている。この点が杜甫詩との違いである。

## 五、杜甫詩と李商隱詩における人間と自然

このような杜甫詩と李商隱詩の違いについて、さらに明らかにするため別の例で考えてみたい。実は、杜甫も常に人間のほうに心を向けていたわけではないのである。小南一郎は、秦州・同谷を離れた後の杜甫の心は「政治と隠逸、人間中心主義とその超越との間を揺れ動」くとする。そして、その精神の揺らぎが後期の詩の独特の作品世界を形成しているという（『杜甫の秦州詩』（京都大学文学部中国語

学中国文学研究室『中国文学報』第八三冊、二〇一二（九四頁）。この揺らぎの一方の極である人間中心主義の超越について、小南は次のように述べる。

それ（人間中心主義：筆者注）とは対照的な、自分も自然の中の一物だとする認識は、政治的な挫折の中で育まれたものであり、政治に関わることを断念し、万物の生命の流れの中に、みずからをも委ねようとするものであった（そうした姿勢のきざしは、前に挙げた曲江詩にも、すでに見えていた）。（九三頁）

このような自然に対する認識を表した初期の杜甫の詩として小南が挙げるのは「曲江」二首である。小南は、「伝語風光共流転、暫時相賞莫相違」で結ばれる其二を示しているが、本稿では其一を引用する。なぜならば、何焯が、李商隱「即日」詩はこの詩の第一句に学んだと評しているからである。このように評されるほど類似した「曲江」其一と「即日」詩とを対比すれば、杜甫と李商隱の人間と自然に対する心情の違いがより鮮明になると思われる。

まず、杜甫の「曲江」二首<sup>(26)</sup>其一を引用する。

一片花飛減却春 一片花飛<sup>(27)</sup>飛<sup>(28)</sup>て春を減却し  
風飄万点正愁人 風は万点を飄えして正に人を愁えしむ  
且看欲尽花経眼 且く看ん尽きんと欲する花の眼を経るを

莫厭傷多酒入唇 厭う莫かれ多きに傷なわるる酒の唇に入るを  
江上小堂巢翡翠 江上の小堂翡翠巢くい

苑辺高塚臥麒麟 苑辺の高塚麒麟臥す

細推物理須行樂 細かに物理を推すに須く行樂すべし  
何用浮名絆此身 何ぞ用いん浮名此の身を絆ぐを  
次に李商隱の「即日」<sup>(28)</sup>詩を引用する。

一歲林花即日休 一歳の林花即日<sup>(29)</sup>に休み

江間亭下恨淹留 江間亭下に恨みて淹留す

重吟細把真無奈 重吟細把して真に奈<sup>(30)</sup>れともする無し

已落猶開未放愁 已に落つるも猶お開くも未だ愁いを放せず

山色正来銜小苑 山色正に來たりて小苑を銜み

春陰只欲傍高樓 春陰只だ高樓に傍わんと欲す

金鞍忽散銀壺漏 金鞍忽ち散ず銀壺の漏に

更醉誰家白玉鉤 更に誰が家の白玉鉤に酔わん

この両詩は去り行く春を惜しむ宴遊が詠まれており、第一句だけでなく全体の構成も類似している。そのため、何焯の評は妥当だと思われる。しかし、その結びは大きく異なる。杜甫の「曲江」詩では、「細推物理」という理性的な判断により「行樂」して自然の道理に身を任せることを選んだと言う。吉川幸次郎は「曲江」二首について「あるいは杜甫一生の詩のうちでも、最も頽唐の作かもしれない

い。」「〔杜甫詩注〕第五冊〔筑摩書房、一九八三〕一六八頁〕と評する。その詩においてさえ、理性を働かせて官僚の仕事と隠逸とを秤にかけるのが杜甫なのである。

李商隱は、このような杜甫の発想には従わない。「即日」詩は、今の宴が終わってもさらに別の宴へ赴こうとして結ばれる。これは杜甫のように人間社会から自然のほうへとしばし逃れるのではなく、春景色の美しさへと完全に沈潜するものである。ただし、ここでの自然は人に安らぎを与えるものではない。それは、美が損なわれてゆくことによつて、嘆き悲しまれるものである。だからこそ、かえつて春の美しさに執着せずにはいられないのである。

李商隱の「曲江」詩には春景色の描写はなく、全体が政治詩として受け取れるものである。しかし、結びに置かれた「傷春」には、「即日」詩と同様の春への思いが込められているのではないか。動乱によつて様変わりしてしまつた情景は、人の心をくじけさせる。しかし、同じく変化し失われるものを惜しみ悲しむならば、春景色には美しさがあるために、その移ろいに対するほうが思いはより深くなる。李商隱が表現したかったのは、むしろそのような思いであった。そのため、杜甫の「傷春」詩のように人間社会へと心を傾けずに終わっているのである。

## 六、結

李商隱は、杜甫詩の影響のもとで「曲江」詩を作った。しかし、結びの「傷春」の語に至り、杜甫詩にも顕著に表れている士大夫の一般的な価値観とは異なつた価値観を示す。これは、杜甫詩に真摯に向き合つて政治詩を制作した結果、杜甫とは異なる自分自身の詩人としての資質を見いだしたということであろう。この「曲江」詩の制作は、後世に唯美的などと評される李商隱の詩風が確立する契機のひとつとなつたと考えられる。

### 注

- (1) 劉学鍇・余恕誠『李商隱文編年校注』（中華書局、二〇〇二）一七二三頁
- (2) 中華書局排印本、一九八七、一二六七頁  
なお、本稿で論じているように、李商隱「曲江」詩は広く杜甫詩の用語や発想を受容して作られており、「哀江頭」詩はそのうちのひとつに過ぎないと考えられる。何焯が「哀江頭」詩を特記するのは、注（4）に引用した『旧唐書』にこの詩についての記事があるためかと思われる。ここで「曲江行」の題で示されているのは、この詩の第三・四句である。
- (3) 李商隱詩の底本は、劉学鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』（増

訂重排本』（中華書局、二〇〇四）とする。「曲江」はその一四八頁。

- (4) (大和九年) 冬十月癸酉朔。：内出曲江新造紫雲樓彩霞亭額左軍中尉仇士良以百戲於銀臺門迎之。時鄭注言秦中有災、宜興土功厭之、乃濬昆明、曲江二池。上好為詩、每誦杜甫「曲江行」云、「江頭宮殿鎖千門、細柳新蒲為誰綠。」乃知天宝已前、曲江兩岸皆有行宮臺殿、百司廨署、思復昇平故事、故為樓殿以壯之。：壬午、賜群臣宴於曲江亭。

『旧唐書』卷十七下、本紀第十七下、文宗下

- (5) (大和) 九年：十一月、李訓兆乱、京師大擾。訓乱之夜、文宗召右僕射鄭覃与楚宿于禁中、商量制敕。上皆欲用為宰相。：仇士良等不悅、故輔弼之命移於李石。：又奏請罷修曲江亭絹一万三千七百匹、回修尚書省、從之。開成元年上半年、賜百僚曲江亭宴。楚以新誅大臣、不宜賞宴、独称疾不赴、論者美之。

『旧唐書』卷一百七十二、列伝第一百二十二、令狐楚

- (6) 中文出版社影印本、一九七九、三五五頁

- (7) 傷春、：也是对唐王朝的前途和命運的憂傷。

陳永正『李商隱詩選』（生活・讀書・新知三聯書店、一九八〇）九〇頁

- (8) 「傷春」顯然是屬於個人身世感念的內容、：比如說、國家衰敗、而自己又無能為力、自己無所作為、而歲月又匆匆流逝、由是而產生一種巨大的難以排遣的人生之悲哀。

羅宗強『唐詩小史』（陝西人民出版社、一九八七）第二節、詩歌新境界的開拓、朦朧情思朦朧境界、二八一頁

- (9) 「傷春」一詞、在李商隱詩中、常有其特別內涵、大体是憂唐朝王室一步步走向衰落而終將滅亡、深慨自身對此無能為力。

鄭中竜『李商隱詩詠注』（岳麓書社、二〇〇〇）一三九頁

- (10) 此蓋傷文宗崩後、楊賢妃賜死而作也。：五六則以甘露之變作襯、而謂傷春之痛較甚於此。蓋文宗受制閹奴、南司塗炭、已不勝「天荒地變」之恨、孰知宮車晚出、并不保深宮一愛姬哉。

馮浩『玉溪生詩集箋注』卷一（上海古籍出版社排印本、一九七九、一四六頁）

- (11) 此詩專詠天宝貴妃之事。結言曲江久廢巡幸、鶴唳銅駝、荒涼滿目、然豈如傾城不返、傷春之意、不愈可悲乎。旧注皆兼甘露之變言、詩意遂不可解。

張采田『李義山詩弁正』（『玉溪生年譜會箋』上海古籍出版社、一九八三「初版一九六三」四五〇頁）

- (12) 傷春、：此特指明皇對楊妃生死不渝的相思。

黃世忠『類纂李商隱詩箋注疏解』（黃山書社、二〇〇九）第五冊、卷九、詠史編、三七三一頁

- (13) 初、楊賢妃有寵於文宗、而莊恪太子母王妃失寵怨望、為楊妃所譖、王妃死、太子廢。及開成末年、帝多疾無嗣、賢妃請以安王溶嗣、帝謀於宰臣李珣、珣非之、乃立陳王。至是、仇士良立武宗、欲歸功於己、乃發安王旧事、故二王与賢妃皆死。

『旧唐書』卷十八上、本紀第十八上、武宗

- (14) 湛湛江水兮上有楓 湛湛たる江水上に楓有り  
目極千里兮傷春心 目は千里を極めて春心を傷ましむ  
魂兮归来 哀江南 魂よ帰り来たれ 江南哀し

『楚辭補注』卷九、招魂章句第九

(15) 杜甫詩の底本は仇兆敖『杜詩詳注』（中華書局排印本、一九七九）とする。この詩は、卷六、五〇〇頁。

(16) 亦互文也。左氏伝（哀公二年八月）、衛太子瑋曰、無折骨。

「心折骨驚」李善注

(17) 底本卷十九、一六九九頁

(18) 底本卷七、五七二頁

(19) 底本卷二十一、一八二三頁

(20) 底本卷二十三、二〇三〇頁

(21) 底本卷二十一、一八九四頁

(22) 初、宦人孟玖弟超並為（成都王司馬）穎所嬖寵。…及戰、

超不受（陸）機節度、輕兵獨進而沒。玖疑機殺之、遂譖機於穎、

言其有異志。…穎大怒、使（牽）秀密收機。…天明而秀兵至。

機积戎服、著白帟、与秀相見、神色自若。…因与穎賤、詞甚

悽惻。既而歎曰、華亭鶴唳、豈可復聞乎。遂遇害於軍中、時

年四十三。

『晉書』卷五十四、列伝第二十四、陸機

(23) （索）靖有先識遠量、知天下将乱、指洛陽宮門銅駝、歎曰、

会见汝在荆棘中耳。…太安末、河間王顥率兵向洛陽、拜靖使

持節、監洛城諸軍事遊擊將軍、領雍秦涼義兵、与賊戰、大破

之。靖亦被傷而卒。

『晉書』卷六十、列伝第三十、索靖

(24) 底本卷十三、一〇八一頁

(25) 底本卷四、三二九頁

(26) 学一片飛花減却春。

朱鶴齡箋注、沈厚埭輯評『李義山詩集』卷上（中華書局

影印本、一九七八）

(27) 底本卷六、四四六頁

(28) 底本、一三八一頁

（文教大学）